



Coverphoto・Essay / Ikuo Nakamura

## まん丸のイソギンチャク



©IKUO NAKAMURA

まるで作り物のようなイソギンチャクが、サンゴ礁の一角にポツンと見えた。それも紫色という実に美しい色だ。触手の周辺には、これまたオモチャのように愛らしいカクレクマノミのファミリーが、あわただしく出入りしている。イソギンチャクがまん丸になったため、隠れるスペースが少なくなり気が気ではないのだろう。

海に潜っていると、ときどき丸まったイソギンチャクを見かけることがある。それも、写真のような紫色から白、ピンク、オレンジなど様々だ。普通イソギンチャクは、裏側を見せず、思いっきり広がった格好で生息しているものだが、どんな理由からか、時折このように丸まるのだ。

潮流が速いと丸くなる、魚など餌を口に入れ、消化するたためきむからだ、などなど、あくまで憶測に過ぎないが、ダイバーたちは勝手に想像をふくらませては楽しんでいる。

クマノミはイソギンチャクと共生することで知られている。イソギンチャクは刺胞という武器を持ち合わせ、これで外敵をやっつけるのだ。クマノミ類は免疫があるため刺されることはない。

こうしてクマノミはイソギンチャクに助けられているわけだが、クマノミは何をお返ししているのだろう。一説によれば、クマノミ類はかわいいので、ほかの魚がつつい近づいてくる。それをイソギンチャクが刺胞で捕らえ食べるといふのだ。要するにおとりである。

しかし海中で見る限り、そんな間抜けな魚は見たことがない。結局クマノミたちは一方的に間借りしているとしか思えないのだが。

### Profile

中村征夫(なかむら・いくお)

1945年 秋田県生まれ。20歳のとき自己流で潜水を始め、撮影プロダクション水中造形センターを経て77年よりフリーの水中写真家に。著書・作品集は『全・東京湾』『海中顔面博覧会』『白保』(情報センター出版局)、『ガラパゴス』『水中の賢者たち』(集英社)、『カムイの海』(朝日新聞社)、『海のなかへ』『熱帯夜』(小学館)、『沖縄珊瑚海道』(アスペクト)など多数。第13回木村伊兵衛写真賞、第9回文化庁芸術作品賞、第12回東川写真特別賞、第28回講談社出版文化賞写真賞、ほか受賞多数。11/29、フォーラム『エコスタイルのスズメ-水中カメラマン中村征夫氏と語る地球環境の未来』で、海から見た地球環境について講演する(新宿パークタワー:中村氏の講演は1時30分~2時30分)。



### 編集後記

いまだきちょっと珍しい旧型の携帯電話を使っています。ゲームもできない、写真も撮れない、折りたたむこともできません。すぐにバッテリーが切れてしまうため、そろそろ買い替え時かと思案しています。それにしても今の携帯電話は、カメラに動画にGPSと、使いこなせるか心配になるぐらい機能満載。実は今の機種でも機能に不足はないのですが、店頭で見ると、やっぱりカメラ付きは魅力的。自分には必要ないだろうと冷静に考えつつも、こういう物欲が景気を回復させるのだ、と自分の心を説得中です。(H.K)

FIND 2003年11月発行 Vol.21 No.6 通巻105号

発行 富士通株式会社 電子デバイス営業本部

企画編集 FIND編集委員会

お問い合わせ先 富士通株式会社 電子デバイス営業本部

FIND編集事務局

〒163-0721

東京都新宿区西新宿2-7-1 新宿第一生命ビル

TEL 03-5322-3326 FAX 03-5322-3395

印刷

株式会社シーコーポレーション